

アイ コ 藍子の部屋

情報をサイトの質に変え、Webとリアルな融合を追求してきたノウハウを活かし、企業の人材登用の活性化を図る新たな仕組みを提案する津田武さんをお招きしました。



ゲスト 津田 武

ニューインデックス株式会社
代表取締役社長
http://newindex.co.jp
1978年三重県生まれ。法政大学を卒業後、米テキサス州のUniversity of DallasでMBA修了。帰国後、新日鉄住金ソリューションズ(株)にて多くの大型プロジェクトで実績を挙げ、独立。2008年にニューインデックス株式会社(株)を設立した。これまでに1,000万ヒットクラスのウェブサイトを複数立ち上げ、知見やノウハウをビジネスに応用。営業的観点と、持ち前のクリエイティブで、常に新たな仕組みを考案している。

藍子 IT分野での企業プロデュースで成果を上げつつ、企業と学生をマッチングするプロジェクトが進行中と伺いました。

津田 『ガクセン』というサービスで、自ら考えて行動し、問題解決ができる優秀な学生を取材して、サイトに掲載します。気になる学生に企業がオファーできる仕組みです。

藍子 年間498,000円で、優秀な学生を探す時間を短縮できる。企業にとっては嬉しい仕組みですね。

津田 最近では、逆に気になる経営者に学生がアプローチできる『社長のカバン持ち』もスタートしました。学生が自分の憧れる社長にアプローチして共に行動する機会を得る仕組みです。学生にとっては質の高い勉強の機会に、経営者にとっては優秀な人材を採用できる機会になります。

藍子 双方にとってメリットのあるプロジェクトですね。

津田 Web上にある情報を増やすことで、企業と学生の出会いの質を高めることを目指しています。

藍子 まさに、Webとリアルな融合ですね。アイデアはどこから？

津田 Webコンテンツの運営を手がけ、1,000万ヒットのサイトを多数生んできたノウハウにヒントがあります。例えば、企業のWebサイトで、SEO(検索エンジン対策)で検索順位が上がっても、サイトの内容が薄いとユーザーにとって充実したサイトとは言えない。大切なのは、ユーザーが喉から手が出るほど欲しい質の高い情報を、大量に発信することです。そこを徹底すればクチコミでサイトの評判は上がり、アクセス数も増え、情報が活きる。そこがWebの本質です。

藍子 情報の質と量が揃うことが重要ですね。

津田 多くの情報を整理して、ユーザーが見たいカテゴリにアウトプットするのが弊社の使命です。



ビジネスコンシェルジュとして、経営者コミュニティを13年間作りあげてきた牛原藍子氏が、毎回ゲストをお迎えして対談するコーナー。主催する交流会、on-line経営者コミュニティには様々なベンチャー経営者が集う。

株式会社ベンチャーサポート
http://venturesupport.co.jp aiko@venturesupport.co.jp



コラム

大坂町中時報鐘

なにわよもやまヒストリー

徳川家光の痕跡が現在の中央区釣鐘町に残っているのを御存知だろうか。家光は、寛永十一年に大坂城に入った。この家光を大坂三郷の惣年寄等が現在の旭区今市まで迎え祝賀の意を表した。これに喜んだ家光は、大坂三郷の地子銀を永久に免除することを約束した。要するに当時の価値で毎年銀約一八〇貫という固定資産税が免除されたのである。これに感謝した大坂の町人は家光へのお礼として釣鐘を铸造した。完成した釣鐘は釣鐘屋敷におさめられ、一日に一二回鳴らされ、鐘の音は現在の天満橋から梅田あたりまで聞こえたといわれている。大坂の時報の役割を果たしたのである。この釣鐘は近松門左衛門の浄瑠璃にも登場する。『曾根崎心中』に出てくる「暁の鐘」とは、この鐘のことである。

あれ数ふれば暁の七つの時が六つなりて残る一つが今生の鐘の響の聞納め死へと向かう二人に夜明けを告げる七つの鐘の音が聞こえたのである。実はその鐘が現在も残っているのである。それが前述の釣鐘町にある「大坂町中時報鐘」である。

地名の釣鐘町もこの鐘に由来する。ただ、この鐘には、紆余曲折があった。釣鐘はこれまで四度もの火災に遭ったが、いずれも生き延びてきた。また明治三年には「時の鐘」が廃止され、その後釣鐘は幾度となく場所を移動した。それを会長の梅本憲史氏を中心となり、地元の人々の努力により保存会が形成され、現在の姿を残しているのである。

鐘の高さは、一・九メートル直径一・二メートル。今も八時、正午、日の入りと三回鐘が自動で突かれている。ところで、家光は鐘の献上に喜び、これに対して銀八〇貫を寄付したのである。

すなわち「釣鐘銘文由来書」によると、家光からもらった「銀八〇貫(三〇〇キロ)は鐘に铸込んだ」とされている。ところが、最近大阪府教育委員会が鐘の成分を分析してみたところ、銀の含有率はわずか〇・一三%とのことだった。つまり八〇貫近い銀は入っていないかったことになる。当時の大坂町人があの家光を騙したことになるのだろうか。



筆者 和田 誠一郎 (弁護士)

大阪府出身。一般社団法人関西経済同友会(幹事)、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団(評議員)、公益財団法人関西・大阪21世紀協会(アドバイザー)、千里文化財団千里眼(同人)、梅田文化サロン(世話人)。趣味は歴史とスキー、各種出版物等でコラムを担当。